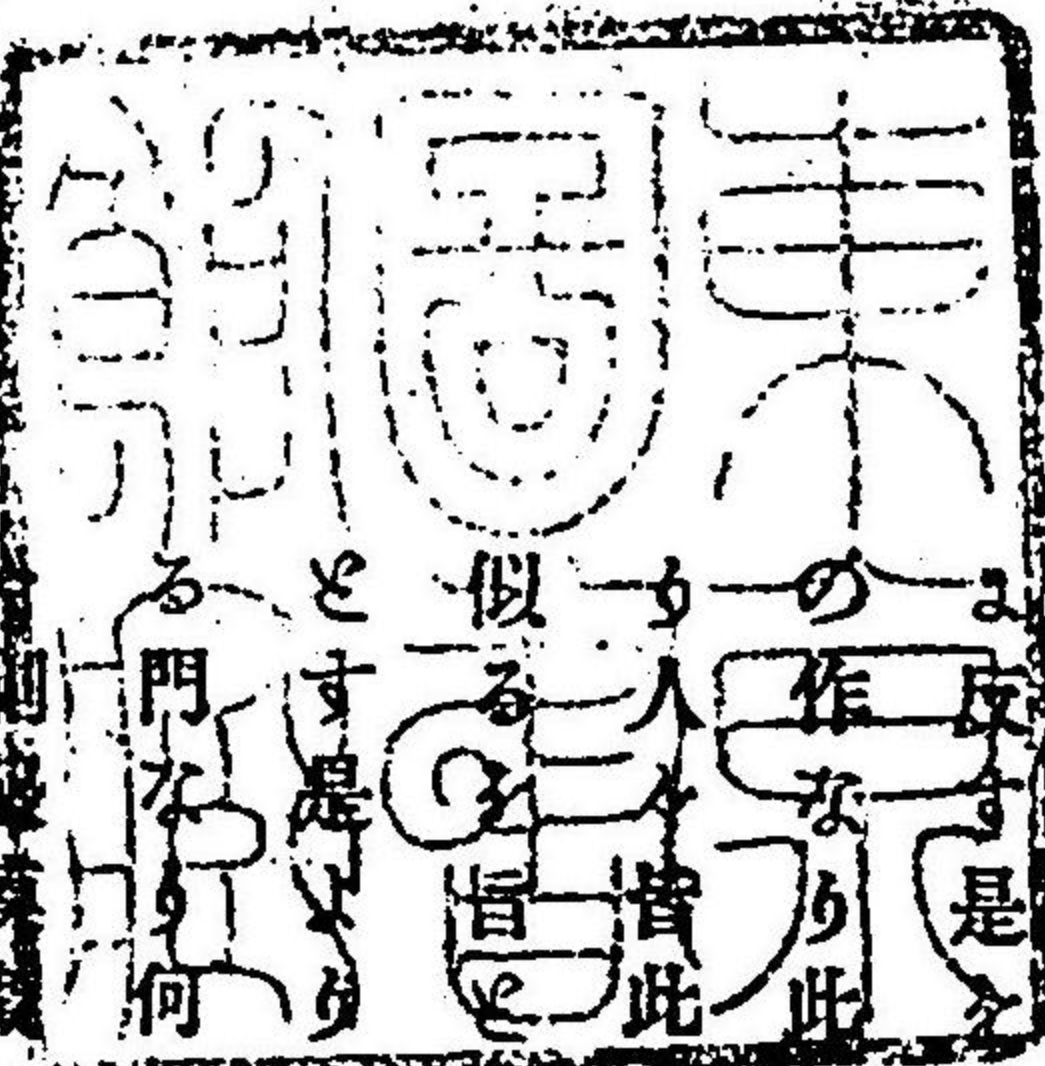


エト3S-57

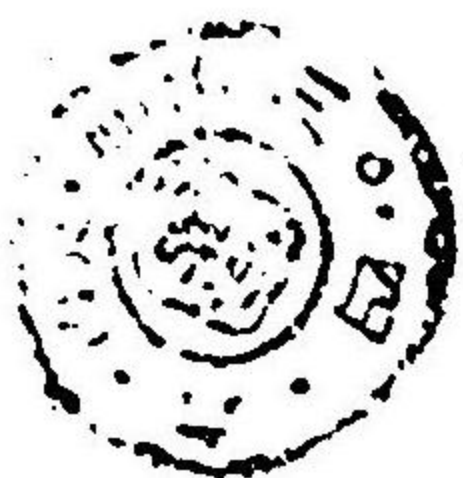


40
494

煙草のむひま

和歌詩の部

龜 崖 隨 筆



古人は詠歎の聲中より發す故に其和歌も漢詩も字々眞句々誠なり後世の人は之
 以て和歌も漢詩も技藝と同視するに至れり其最本旨は悖りしは詠物
 の作なり此弊は後世寧ろ詩より歌より甚し五百題千題とて作るもの多くは詠物な
 り人々皆此題なるものを詠して心よもなき言葉を造るなり抑も詠物なるものは
 似るを旨とす而似て俗なるものあり雅なるものあり雅にして工みなるものを可
 とす是より意の工みなるを上とす此修行も亦容易ならず而歩を誤れば邪道に入
 る門なり何なれば畢竟造りものよて眞に感發して性靈を抒すはあらず故に往
 今則ち摸擬の弊に陥る中古以後の歌人詩客は歌詩を文藝として内外の分を忘れ
 心を學はすして工みを學ぶは千古の遺憾と謂ふへし萬葉の歌漢魏以上の詩とて
 必工みなるはあらず然れども摸擬虚構のものはなし故に歌詩の眞聲と謂ふへ

し是余の歌は萬葉を尊ひ詩は漢魏以上を喜ふ所以なり左より古歌一二を記す

袁祁命の御歌

おきめもやあふみのおきめあすよりはみやまかくりてみゑふかもあらん

輕太子の歌

天飛鳥もつかひそ田鶴かねのきこゑんときは我名とはさね

輕太郎女の歌

君が行きけなくなりぬ山田鶴の迎をゆかんまつよはまたし

是は千有餘年以前の歌なり風調自然にして後人の工を用たる者と異なる而其情の切なるは後世の歌の言葉を綺麗にしたる者より勝る後世は詩も歌も只言葉をもてあそびて知らず情は度外となりたり抑情の外は歌詩あるべき附れなし古人は己の心情より歌詩を詠し出し後人は歌詩は心情を役せらる故に聞く者も亦其人の心情は察せずして只其歌詩の工拙を論し其工は感す然らば人と人との間も歌詩を擬入したるなり中間一物を參へ争か膚切の感覺あるべきや一上古の歌は今の發句と同じ賤の女もよく詠す今の發句は上古の時の歌より難

し地下は芭蕉も歎息するならん三百篇の詩は田夫野人の語も多し今は支那人詩を作り得ぬもの多し庚盤は百姓共告げたる言葉今は學者頭をやましめ讀得す

一漢の高祖は文學の保護神文學者は醫家より於ける神農の如く祭る可なり而偽書
の保護人とも謂ふへし

一文學の發達は漢の世の賜ものなり秦の運長く漢興らされは古文字は殆ど跡を
断つへし支那の學者其徳を稱揚するものなきは恩を知らざるに似たり或曰く
漢代文學復古せされは支那の文明更なる新なるへし

一履中天皇の御歌

はよふ坂我立ち見ればかきろひの燃る家村妻か家のあたり

大坂は逢ふや乙女を道問へは只よはのらすたきましをのる

是は急迫危険なる時の御歌なれども至つて易すらかよして其時の様想ひやら
る芭蕉か唐崎の松は花より靡みて李白の牀前看月光疑是地上霜舉頭望山月低
頭思故郷此類至つて易すらかよして工夫苦吟して成りしよはあらず目よ見心

よ感し聲となりしならん後世よ至りては歌は猶更發句も六ヶ敷して急の間よ合はず己の喜ぶ聲も嗟く聲も工夫爲さねは出ぬとはさてく不便千萬なり

一唐の張巡の城陥んとするときの詩不辨風塵色安知天地心言葉やすらかよて景情ともよ至り今吟誦しても慷慨よ堪へず感歎已まさらしむ而六ヶ敷字なく工夫を極めたる處もなし矢張幸崎の松は花よりの發句と申し誠よすらくしたるものなり歌人よ詩人よ發句家よ六ヶ敷考へて不便なる工夫を凝す了簡は止めよ

一歌詩發句の俄よ出来ぬと云ふは心よもなきとを言んとする故なり余は一日よ百絶を作りしとあり雲在菴集に録存す余は師よ就き眞の修行を爲さぬ故下手なれども興至り心よ感する時は口を衝ひて句は出るなり人よ題詠を頼まれ詩會などよ呼はれ勤めて其席よ列する如き場合は苦みても一言半句出でず是他なし吾心よ感しもせぬ事を考へる故なり思へは歌詩を義務よして引受るか誤りなり後世の人否嗟詠歎のこしらへものするは俳優の營業をまねるよ同じさてもつらき次第なり昔の海老藏白猿の話も想ひやる

一後世歌人とか詩人とか稱する者の出来たるは既よ歌詩の衰へたる所以なり周の比よは詩人として門戸をなしたる者あるを聞かず然れども詩の佳作あるは三百篇を讀ても知るへし我邦の歌も千餘年前は別よ歌人といふ専門家もなく都も鄙も能く歌よみたるなり人丸も赤人も歌を以て門戸を立てたるよはわらず李白も杜甫も詩の専門家よて世よ立ちしよはわらず然るよ後世よは歌人詩人として歌詩を業として他よ營業ありるにもせよ教授するよ至つては極點論なれども悲しむ聲喜ぶ聲を稽古するといふも可なり淨瑠璃の稽古場なれはともかくも己か否嗟の聲調を學ぶといふ事やある歌人詩人として門戸を立つる世よなりしは歌詩の本意を失ひたるよて其道の衰へたるなり

一論語よ

鯉趨而過庭曰學詩乎對曰未也不學詩無以言

是は當時聘禮の席よて必古人の詩を誦して己の志を述ふる慣習なる故古人の詩を暗誦會得せされは實よ人と相對して言ふ事能はさるなり己詩を作るを學ぶよはわらず

一我邦古代人々歌を作るは先輩の歌を聞き覺へ吟詠して會得し己の詠歎聲調をなしたるなるへし後世歌を慰みものゝ藝とし性情の感動外も題を課して作らせる事となりし故心よもなき人の口まねも始り何々の風などと云ふ事出来人を感せしむるはさてをき己の心よ問ふても心よなき事を言ふに至りたり詩も亦後世は此弊同し事よて見る人其詩を評して淵明よ似たりとか韋蘇州よ似たりとか王漁洋よ似たりとか趙雲菘よ似たりとか評をなし評を受ける人も淵明氣とりよなりて自他疑はずこゝよ及ひ歌詩とも役者のこわゆる鸚鵡の口まねよ近く靦然得意顔なり詩歌の本意を失ひたるは申迄なく人生權命の如くなる日月を心よもなき歌詩よ消光する氣の毒の至り惟我獨尊の身を持たなから他人の真似よ終る歎すへきなり歌詩の實用はなく苦しみてこしらへものすることとなりし故よ人々百人一首暗誦しても一首の歌も出来す自然よ上手下手はまぬかれぬ事なれども人々詠歎の聲はなくて叶はぬものなり然るよ歌一首も出来ぬは人々心の用ひ所の相違したるよ由るなり

一昔五山は慶賀の詩を頼まるゝよ困り兼て松や鶴の詩を作り置き求めよ應して

書き與へたりと其著書よて見たる様よ覺ゆ扱も難義なる趣向なり

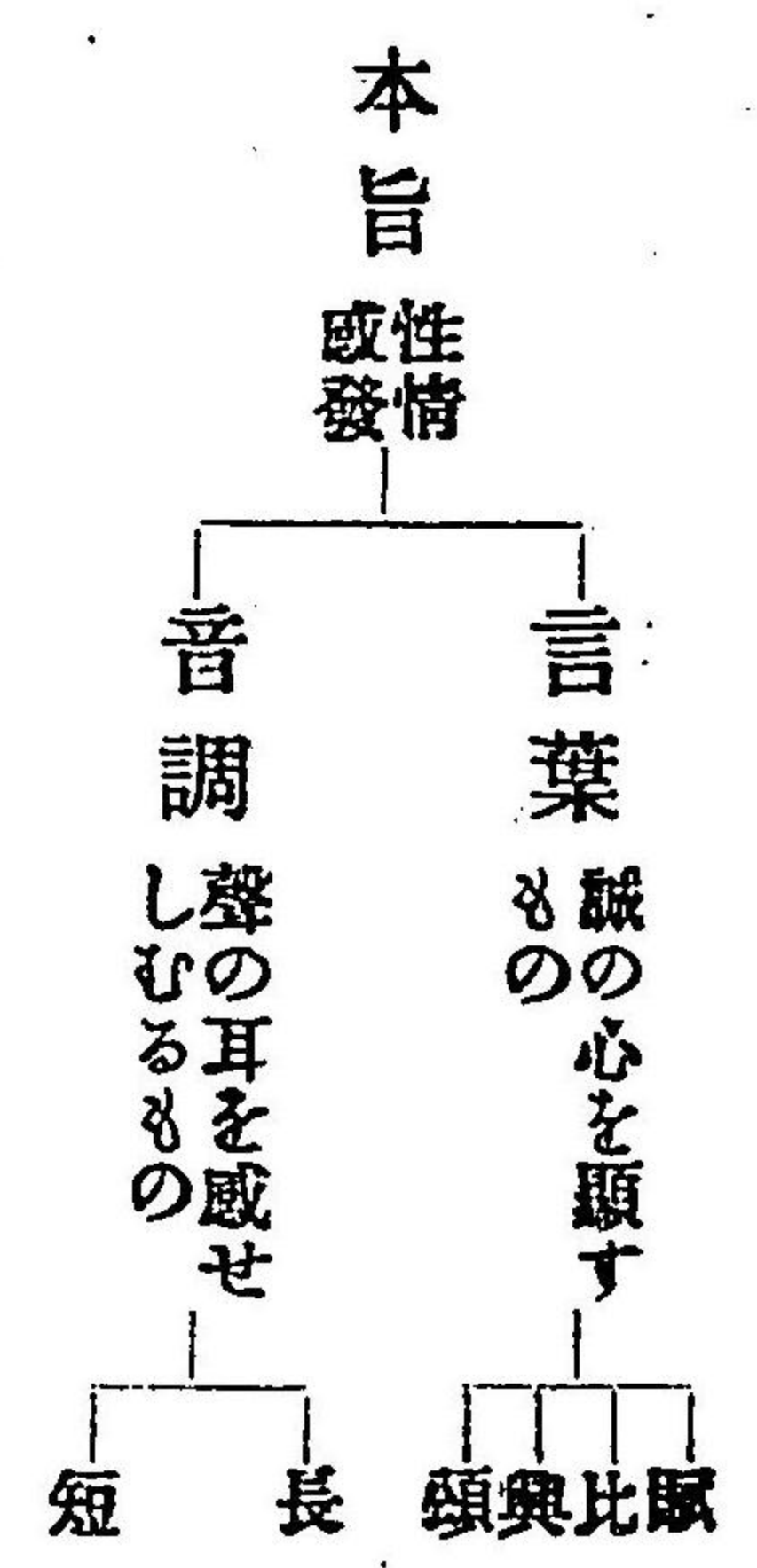
一木曾の林小參といふ人は相識らされども屢書を寄せて其祖兼平の吊詩を請ふ書至る二年よ及ふ是を以て余の心動き當時の事を書きし史を讀み感する心を發し絶句一首書き贈れり此類多くあるよ困却す余は詩人よわらざる故よ索めよ應せざるもあり應せざるよわらず我よ感する所なくして應する能はざるなり

一詩よは韵字あり字毎よ四聲を暗記するは容易の業よわらず歌は詩と違ひ韵を一々覺へされは出来ぬものよわらず又長歌は通用少なく先づは三十一字の格のみ覺ゆれば用は足るなり且我か邦の言葉故至つて爲し易し詩よくらふれば難易同日の論よわらず然るよ歌作る人上手はさて置出来ぬもの多くなりたるは如何余は思ふよ是れは中古以後王朝の衰へよ伴ひしものなり王朝の衰ふる歌は公卿方の持ものゝ如くなり一種の技藝として遊ふより傳授事など始り免許を得されは歌よめぬ藝起り公卿方の門よ入らされは世間よ歌人らしく取扱ひを受けず昔春盞は歌よ志深かゝりしか歌よみとなりて公卿方の上へよ

立つ事は時勢爲し能はざるを慨し志を改めて詩作る事を學ひたりと其著述を見へたり當時かゝる有様故和學者即歌よみと謂ふ一派の者の外は公卿方の爲す業と思ふて手も出さず又武家は柔弱の業として多くは願みすかくなり行きしも時人のをもはくのみよあらず將軍のおきてよ於て公卿方は歌を専ら修業爲さくればならぬ事とせし故強ひられて歌の稽古爲す人もありしならん王朝の衰へたる以後は眞の歌よみもなきはつなり維新以後此弊漸く一變したれども歌道は猶全く古よ復せず又漢學者流は歌を俗視し我邦の文粹たる事を忘れたる如きは甚ひか事と謂ふへし今や洋學盛くなり行き文學士の研究する迄のものとならば愈歌は衰へ行くなるへし

一昔の詩作る人は周公始め名をあらはさす今の歌詩作る人は新聞よて己の名を披露す昔は歌詩を見て其人の正邪を知る今は萬言の著述を見ても其人の心底は分りかたし

一歌よ本旨二義ありといふ吾説を今試よ譜を作り猶敷衍して述ふ



夫性情の感發は決して偽りなきものなりたとへは悲しき時よ泣き喜ぶ時よ笑ふの類天機の活動よあらざるはなし事々物々目よ觸れ耳よ觸れ感動して聲となる音誠なり其切よして甚急なるや聲のみ其緩なるや言葉をなし調をなす調は響なり響ある必應す天の道なり其言や自ら體用生す是よ於て其體賦となり比となり興となり頌となる而各働を異よす其働や用なり賦比は悲喜共よ通す興は多く喜よ屬し純然たる悲聲よはなし頌は賀頌なり而此四つはなくてならぬ自然の別なり古の歌を擧て其別を證すへし

古今の歌

賦 梅か枝よきいる鶯春かけて鳴けともいまた雪はふりつゝ

比 心ざし深く染てしをりければ消あへぬ雪の花と見ゆらん
興 花の香を風の便りよたくへてそ驚さそふしるへよはやる

右は古今の巻首よ就き撰みしものよて巻中よは猶區別判然たるもの多くあり扱
頌は慶賀の歌故擧ぐるよも及はず戀歌よは比の體多く述懐其他よは賦の體多し
閑適宴會よは興の體多し是亦自然の働きよて人好て爲すよわらす故此三體の分
れは自然の別といふへし

一業平は歌よ工みなる人なり三河よてかきつはたの折句は絶妙好辞といふへし
芭蕉も余と同しく業平の歌を感誦せしや三河よ至り其舊跡を吊ふてかきつは
た我も發句の心ありと吟したるよし何とも工みを用ひぬ處妙々昔崔顥黃鶴樓
よて七律の名作あり李白は其後よ黃鶴樓よ至り崔の佳作よ感し去つて風凰臺
よ往き律詩を賦したると云ひ傳ふれども是は後世の人こしらへし話なるへし
一明治五六年の比より世漸く靜かよなり文事盛よ行はれ歌の會詩の會起り余も
亦朋友と吟社を結ひ相會せり抑も歌詩の會は歌詩よどりては本意よわらす朋
友親しみを厚くし仁を輔くるよ益あり然るよ其名歌詩よあるを以て歌詩よな

つむといふ事の免れかたき故歌詩の會は汝爾の間のみよ限るへし若し貴賤等
をことよし官位しなをことよするときは徒らよ歌詩の爲めよ時を費し人の詔
諛を容れ或は奉承の道を啓き勞して損あり友を以て仁を害するもしるへから
ず同等親友の間よ於ては歌詩の興よ入らぬ者は勝手よ笑談飲食して樂むへし
心よ遠慮なき故切磋の益を受る事もあるへし歌詩を名よして會を爲すは其友
よより害なく益あり

一みな人は花の衣よなりよけり苔の袂よかわくたませよ

此歌は僧正遍昭の前書よ深草の御門の御時よ藏人頭よて夜晝なれつかうまつ
りけるを諒闇よなりよければ更よ世よもましらすしてひえの山よのはりて頭
おろしてけり其又の年皆人御服ぬきてあるはかうふりたまはりなど喜ひける
を聞てよめるとあり此序文よて如何よも其心よく分り殊勝よ覺ゆ此序文ちと
長すきたるやうなれども歌詩よは序文も必用のものと思ふ

一詩經よ關雎の篇

窈窕淑女 寤寐求之 求之不得 寤寐思服 悠哉々々 轉輾反側

又恨の篇

乘彼境垣 以望復關 不見復關 泣涕漣々
其前章よ

匪我愆期 子無良媒 將子無怒 秋以爲期
風雨の篇

風雨如晦 鷄鳴不已 既見君子 云胡不喜
青衿の篇

挑兮達兮在城闕 一日不見如三月兮

是等を無遠慮に講譯せんは第一の周南關雎の篇の言葉は心たて姿ともすくれし女を戀ひ求てそれか忘れず目も見へる様よて寐てもねられず終夜ねがへりのみしてもだゆるとは扱々甚しき無遠慮の言葉ならずや如此あからさまに言ひ放ちたらんは最早隠すことばなしと思ふ其次きの鄭衛の詩の言葉の方猶ましなり然るに關雎は樂て淫せずと謂ひ鄭衛は放つなどと罪人を放逐する様よ謂ふは何事そや是全く言葉よはあらず其調子ふしを謂ふならん鄭衛の聲

は淫聲よて近く響ふれば新内ふしと長歌ふしとの相違あるか如き事實なるへし淫聲なれば本より其言葉も淫奔の語多かるへし淫聲の人を淫よ導くは免れざるものと見へ今は知らず昔は北里よて廊中新内ふしを禁したりと聞けり新内のふしと感して往々逃走同死を謀る輩ある故なりといへり古き端歌よ君こそはねやへは入らし柴の戸を出てはかへりかへりてはゑんの橋塙の遠砧もてくる風のをどつれよのそひて見れば我より外よ影そなき誰の作よや言葉もよし調もおもしろし此歌前の詩經の詩よくらふれば遙よまさりてはつかしからず然るに其腔なり雅調よあらざる故よ大人君子高貴の宴席よてうたひものよもならず是等の歌は多く歌澤ふしよてうとふ其ふしは新内ふしの如き下品なる淫聲よはあらず艶凄なる音よて今時の流行端歌の言葉もふしも聞かれぬものよ比よあらず然るに此類の歌も既よすたれて歌ふ人少なく新内ふしは存して行はれ卑猥下品の流行ふしは日々盛んよ成り行く世の様は如何

一歌詩の兼題會席を催すは歌詩の本意よあらず假りて以て補仁の手たてとするは格別左なくして歌詩を主とする業なれば爲さるるをよしとす或人此語を聞

きて曰く修業中は題を得る爲め兼題會席の催しも又一つの都合なるへしと
 是も一理ある事なれども我を以て觀るときはほとんど考への外なり我は一日
 中題の多くあるも苦しむなり今朝朝顔の初てさきたるも萎みたるも日中の苦
 熱も緑槐の吟蟬も夕かた釣りしのふの風も動くも山の端の月も雲のかゝりし
 も雨雲の出で潺湲となりしも飛蛾の集り來りて書燈を撲つも題ならざるはな
 しまして友の訪來れば其うれしき面白き物かたりもあり題を得る少なからず
 歌詩の間は合はぬも困却す題の乏敷と云ふ事は夢も考へず昔子路は善言を
 聞を恐ると是は善事を履行せんとして問は合ぬ故も恐るゝと解釋するも可な
 り歌詩の題となるものは多く題の多き程も作れぬ故日々題の多くあるを恐
 るゝ事は余も亦子路と意を同じくすと云ひしも其人もことはりどや思ひけん
 再ひ問はすされと其人の云ひし如く歌の専門家とならんと思ふ人は千首題も
 一ト通り自己吟詠して見されはなるまし夫れは日夜耳目も觸るゝ丈にては
 足らぬは尤なりされと必兼題會席を催すも及はず己自ら千首題を日課として
 詠して修行は出來得へし然るときは五百題千題の中にて時々從ひ己の興ある

題を詠する便あるへし此の如くなれば暑中心もなき雪を詠し又は目前よわ
 らぬ鶴や鷹杯詠する事なく誠の道も背かぬかたもちかゝらん然らば歌の本
 旨を失はすして修行も差支なかるへしとかく心もなき兼題を拾ひて歌詩
 よくるしむは物すきの所爲として余は好まず

一東坡は淵明の詩を常誦すといへども樂天の詩をも喜ひたり東坡と云ふ號は
 樂天の詩より出たりと云ひ傳ふ樂天の詩は往々俗氣ありと云ふは古人の評な
 りいかよも多作中よりは俗なるものもなきあらず其詩を誦せし東坡は俗氣あ
 りと云ふ評は受けす余は思ふ東坡は樂天の能く性情を詠したる旨を喜ひたる
 ものなるへし

一古今集も僧正遍昭の歌

名よめてゝおれるはかりそ女郎花我おちよきと人よかたるな
 又後撰も同人の歌

世をそむく昔の衣は只一重重ねはうとしいさふたりねん

佳調云ふまでもなし然れども僧正として此の如き歌ある戯れも如何なり余

は西行の戀歌あるを惜む西行より戀歌あり他の僧の戀歌ある怪む足らず父母の前は戀歌を出して示す無頓着もの世よりや蓋しなかるへし釋迦目前よりあり戀歌を磨きしやれよもせよ心恬然なる吾は其心を解し得す

一西行は歌調尤妙西行の戀歌山家集に載せたるものよても二百數十首あり詩は姜薄命閨怨宮詞など情詞少なからず慷慨悲憤の意を男女の情に寄せて言ひなしたるは楚辭を始めとしてためし多き例なれども我邦の歌は左様の習ひも思はれず彼の法師として戀の歌はなくもかなと思ふ

一古今集は三條の町の瀧の書に題したる歌
思ひせく心の内の瀧なれやおつとは見れど音のきこへぬ
此の如き歌に至つては眞工みなる趣向と云ふへし然れども此の如き歌世に顯るゝに至り歌の衰へ行く兆こゝに顯れたりと思ふなり

一歌集世に公け成りしは左の時代あり

萬葉 聖武帝
古今 醍醐帝 延喜五年

後撰	村上天曆五年	初撰	初撰
千載	段鳥羽中二年	續撰	宗尊親王
續後撰	後深草三年	續撰	宗尊親王
續古今	龜山二年	續撰	惟康親王
續拾遺	後宇多二年	續撰	時宗親王
是より先き文永四年東鑑成る			
新後撰	後二條元年	久明親王	師時親王
金葉	花和二年	守邦親王	高時親王
續後撰遺	後醍醐二年	全全	
新葉	後龜山元年	義滿	
新續古今	後花園十年	義教	

前記の集萬葉は申迄なし古今も佳なりされど其他の集中は余か觀るを願はざる歌もあり足利の末より徳川に及ひては觀るを願はざるもの多し歌は王朝の衰へども一時衰頽せり

一自己の詩を支那人に見せ黜削を乞ふは和習を正すはよし彼等の諛言をならへ立てたる評をまゝ受くるはよろしからず抑も歌詩は七情の感動發する聲なり固より他人を示すもの非ず知己に贈るは然るゝ刊行して世間を示すは自己のこぼすぐちや不平の聲を自慢を吹聴する意に近し此開祖は唐の白樂天なり余は思ふ人世の得失榮辱一切兒戲をひとし此兒戲を心を動し歌となり詩となる扱も赤面の至りならずや

一唐詩などを講釋するものあり固より營業請はれて爲すわざなるへし其の講ずる所一詩中も天文地理風俗人情法度儀制器物技藝一切當時の有様を説き明かさねはならぬ故長安古意一篇を講釋するも先生の取調容易の事ゝあらず能くも詳悉説き明かし當時の有様見る様講釋すれども詩の妙處ははなしゝならず先生鼻をひこつかせ獨り感して聲調變化の大凡を言へども聞く書生は終ゝ分らず只字句の講釋を止り詩の妙處の講釋は出來すともく詩を講釋するか馬鹿毛たる辯勞なり余戲々詩經の詩句を以て之を評すへし

碩人俟々赫如渥赭

頂より湯氣立ち昇り額より汗流れ出て先生骨折知るへし

我思古人實獲我心

説て佳句ゝ至り先生會心察すへし

莫赤匪狐莫黑匪烏

書生見臺の三方を謹聽す

叔兮伯兮哀如充耳

書生聞けども妙味は終ゝ解し得ず

詩を志す書生は詩は精讀して自得すへし

一或人の話ゝ詩は古より不平家慷慨家癡情家の持物なりと如何も概論するときは左様なるへし兎角感情淡く物事とふてもよしと思ふ人ゝは歌詩の情も少きなるへし又中ゝは感情鈍き人にて歌詩好きあり是等は歌詩の句調面白き事を知り只歌詩を役せらるゝ徒なり是は上手とても欄外を置き大凡歌詩の出來る人は情の響き強き者ゝ多かるへし七情の感覺強き者の持物とゆふの話聞れる事なり

一 速須佐之男命の八雲立つ歌を歌垣の始と或る學者は謂へり餘り定め過ぎと思ふ大凡七情の感覺は男女間より甚しきはなし歌は戀歌多きを以て知るへし只歌のみならず詩も亦同じ詩經國風の詩戀の詩頗る多し我邦の歌と同じ事なり古代歌を以て婚姻の媒とせしはあらず禮を以てするもせざるも男女間の感情動ひて音調となるなり鳥の春は鳴き虫の秋は啼くも同じ事の前歌あるもわり事の後歌あるもあへし

一 詩經の詩韻中韻の合ぬ如き字は朱熹叶韻と註せり固より韻の合ぬはあらず特は叶韻とゆふは及はず當時は梁以後今日の如く韻細密は分別なく今より觀れば通韻とか叶韻とか謂へしといへども當時は於ては差支なきなり故は寧ろ叶韻とか通韻とか謂はぬか古義は適當すへし今詞韻は別は詞林正韻等の書出來て其韻の分合又詩と別は區域廣し詩經の詩も其比區域廣く故今詩韻分合の眼を以て觀ては韻合はぬ如くなれども周比は同韻は用ひしなり

一 歌も詩も發句も同じ事にて皆人の天性は發する詠嘆の音調なり人の性言語のみよては感嘆の情を盡す事能はず是以て詠歌して其感情を聲は發するなり故

は詠歌は必言語と同じからず是亦天則なり言語は委曲詳悉すといへども感情却て淺く詠歌は言葉簡歌なれども其音調深く人を感せしむ同じく口より出る聲なれども全く同じからず昔より詠歌の道知らぬ人は鄙野の嘲りありとて詠歌を爲す事を勸む余曰く詠歌を知らざるとて鄙野もあらず知りしとて君子ども謂ひかたし但し禽蟲も時は感して發音する事を知れり人の能く詠歌音調を爲すは即鳥獸と異なる所以なり詠歌を爲さぬ人は七情の感切ならざるもの歎抑も人の人たる天稟の機能を働かさざるものと謂ふべきのみ扱又詠歌の語は詳悉常の言語の如くならざるを要す古今其旨同じ古人は自然質朴として修飾なき故は簡歌の言は最妙あり今人は言葉よつや多くなりし故其つやも感はれて木地の見へぬもの往々あり故は古人の歌は質朴中は妙あり今人は綺麗中は妙調あれども失も亦多し失とは常の言語は近く感淺きものを謂ふなり唐時代安祿山の亂中太守張巡城陷落の前殉難の場合に作りし詩句は「不辨風塵色安知天地心」此時は張巡の忠君報國の鐵石心を打ち死に顯す前故悲憤慷慨激烈の言時々發したるなるへし然るは其言のみよて歌むべからずして詠歌は發

すれば其音調前二句の如く幽怨温雅なる餘情は言外に溢れ面前憤慨の語を聞くよりも腸を裂くか如き當時の有様想ひやられ千歳の今日吟する人をして感轉た己まさらしむ是則其妙たる所以なり又同時胡塵に苦しみ艱難中より作りたる杜甫の詩句唐以來杜甫李白傷時花濺淚悲別鳥搖心誠名句なれども少しく露出して簡歌ならず云はし言過ぎて常の言葉に近つきたり張巡の二句と此二句と再四吟詠してみゐるへし自然に張巡の句の方語調感盡すして情深きを悟得へし又悲哀の言は尤も人より切なるものなるも古今貫乏明日しらぬ我身と思へど暮ぬ間の今日は人こそ悲しかりけれ質朴の言なれど理屈は落ちたり千歳集撰みしころは歌猶古風を存したる時なれども其集中成範の歌も鳥部山おもいやるこそ悲しけれ獨りや苦の下に朽ちなん只々御尤と謂ふ評を下す外なし美術會の参考ものもならぬなり彼の萬葉もある東かしの瀧の御門よさむらへどきのふもけふも召す事もなし悲しども戀しども云はすして暗涙臆を露し悲哀の情胸に迫る右と同妙調の發句或人云加賀の千代女子を失ひたる後、蜻蜒釣り今日はどこ迄往つたやら儼々十七字萬葉瀧の御門の歌と實は優劣なし

又芭蕉の夏卿や兵の共の夢の跡古戦場の景情人をして感歎已まさらしむ後世本歌は靡麗僞構修飾の言葉となり人を感せしむるに足らぬ故に芭蕉の如きも出て詠歌の原道に反り性情を煥發せし故に儼々十七字を以て天下を風靡したるなり故に發句の行はれたるは歌人の罪にて實は歌道の衰微なり苟も和歌に志しある人は和歌の本原に基き我か宇内唯一の音調をして天性の本旨を益愈發揮し永遠國風を保持するを勉むへし余思ふ維新の後古に全く反らざるは獨り歌のみ他は宇内日進の開化に従ふへしといへども歌は右に關せず古に復すへし猶古に反るを思はず本旨を置て唯工を主とし歌を文學技藝の一つとしたるか如くならば誠は歎すへし我邦の歌道は自ら古風を維持する關係あり支那西洋の詩と同視すへからず歌を以て任する者は志を立て眼を開かずんはあゝるへからず扱又歌發句とも名人として其名に迷ふへからず貫之の歌千代女の發句として取るへからざるものあり千代の發句も朝顔うつるへどられてもらひ水是は名吟佳句なれども朝顔の下はさくのをあふなかり此の如きは人の言ひ得ぬ工みなる句なれども工夫は落ち詠歌の本旨を失ひたり故に上手として折々は

失あるものなり是以て八代集の如き貫之の如き人よりも其歌皆金玉とは謂ひ
 かたし古今を論せず能く讀て善惡を鑑別し其善は従はずんはあるへからず其
 善なるものとは工夫は落す理屈に入らず真情煥發し修飾して綺麗ならず言葉
 は自然の文あり氣骨ありて音調も亦穩當なるもの眞の上乗とすへし之は反す
 る歌は余の願はざるものなり此眼を定めんは己の得手は歌はわれ詩はわれ
 發句はわれ己の得手の外のものとして捨て置かず古人の集を能く讀み考ふへし
 歌人は往々發句を鄙野として其集を手にも取らず詩人は歌を婦女子の學ひも
 のゝ如く別視し其集手にも觸れず歌人も詩人も右の如き弊あり己の得手なる
 ものゝ外は境外は放棄して研究するもの少し古人は然らず萬葉一部讀みても
 分るなり歌の題は儘漢土六朝の四六風なる漢文なり或曰發句を作れば歌は害
 あり歌を爲せば發句和歌調となり妨げありまして詩は我邦の文はありすと異
 類を見做す輩多し此輩は詠歌の本原を衡量とせず只其形のみを見る故に害あ
 りとをもふなり然るは詠歌の本原は同一理にして己の性情を吟詠する眞趣は
 少しも異なる事なく人類發音の妙境は實は歌詩に止るものなり若し果して漢

文を學ひて歌は害あるものなれば家持山上憶良等の如き歌よみは出來ぬ筈な
 り前より如き辯説をなすものは古人の苦學を知らぬ者のひか言となり此の
 如く言へば己歌を學ひたる様なれども實は學ひし事なし抑も歌詩は古人の集
 を精讀し暗誦するに至れば其材料腹に入り物事を感じする毎に詩や歌の拍子の
 言葉となり出るなり即是歌即是詩隨つて一以て貫く眼にて善惡を判別して善
 に進むときは其道を誤らぬ歌詩も出來得べき事と思ふ其識見は己歌詩を作る
 下手よりも道理の分らぬ事はなき筈なり何なれば歌詩は己より發する誠人を
 待つものゝあらされはなり

一金明軍哀悼歌

かくしのみありけるものをはさの花さきてありやと問し君はも

又

君は戀ひいともすへなみあしたつねのみなかるゝあさよひよして

家持哀悼歌

今よりは秋風寒く吹きなんをいかてかひと長き夜をねん

又

さはやまよたなひく霞みる毎いもをおもひ出てなかぬ日はなし

金軍の歌二首自然に發する哀音其響き千歳の今日吟詠する人をして當時を想ひやりあはれを催さしむ家持の歌と甚優劣なく其情を察すれば人の事とは思はれずして愁を覺ふ歌は如此にして鬼神をも感せしむへし是他なし余常云ふ其旨誠なるか故なり後世の歌は言葉のあやみのみ心奪はれ歌作らんとて作る故に只々綺麗なる造りもの出來て其音調削りたてゝすらくこたはりなきものどひとしくとはいへ自然に圓滑なるものとは其實天淵の相違ありさて金軍の歌第一は尤妙第二の君の歌は乙とす何なれば他物をかりて情をうつしたる故なり歌は上古より下を起す言葉出來て所謂枕詞を以て語調を整ふる習其常道なれども窮論すれば枕詞なるものは自然の語にあらすして大本は自然の語にあらすして人意の助聲なり故に枕詞あるものは眞の天籟とゆふへからずあしたつの音のみは詩の比興ともあらず全く朝夕泣くとゆふ枕詞なり故に他の言葉よかゆるもかへられぬ事はなきなり第一かくしのみの歌は徹頭徹尾三十一文字

一字もかゆる事を得ず毎字情ならざるなし是其天籟第二の歌は勝る所なり又家持の歌は第二を甲とす今よりは秋風寒く吹きなんを此語調を味ふと眼前に感觸するものと自ら差違あり即ち思慮を渉るものなればなり第二の歌に至つては然らずさは山と云々其語は過去にも渉るべきものなれども現に佐保山の霞に泣きて其情歌となりしなり其造語に於ては二首とも一字一句假設なくかゆへからざる至情なれども自然に甲乙の差なきを得ず大凡歌の妙調は修飾の語に發するものにあらず天籟に非んば語調人を感動せしめず又四首を合せて評をなせば家持の佐保山の歌を以て最第一の名歌と謂ふへし其次きは金軍のかくしのみの歌よろし今是等の歌と唐詩と比較すれば

岑參の絶

強欲登高去 無人送酒來 遙憐故園菊 應傍戰場開

韋蘇州の絶

遠聽江上笛 臨觴一送君 還愁獨宿夜 更向郡齋聞

此二詩は家持の第一の歌今よりの歌と語調相似て優劣なきものなり

王昌齡の絶

二十八

西宮夜靜百花香 欲捲珠簾春恨長 斜抱雲和深見月 隱々樹色隱昭陽

此詩は金軍の歌第一のかくしのみと匹敵の佳作よて金軍の歌の方實況故勝れり

李白の絶

牀前看月光 疑是地上霜 舉頭望山月 低頭思故郷

此詩は家持第二の歌さほ山の吟と優劣なし今人よは或は前四首の歌耳よ盈たさらん然るよ愚意よては如此歌こそ眞の歌とゆふへく思ふ余猶一步を進めて閉へは結廬古城下時登古城上古城非時昔今人自來往歌も詩も平淡よして言外よ餘情あるもの上乘なり

中大兄近江宮御宇三山の歌

わたつみのとよはた雲よ入り日さしこよひのつくよきよくてりこそ

法性寺入道關白の歌夫木集

入り日さすとよはた雲のけしきよてこよひの月はそらよしりよき

此二首を讀て余は長大息す古今言葉の變化は姑く論せず遣語氣骨あるとなきと風韻して自然よ感すへし詩よ於て漢晉と宋以後との相違あるの思ひあり李白の建安の骨とゆふところも此二首の歌よて考へ得へし余嘗て云ふ歌を以て詩を考へ詩を以て歌を考ふ異類對照して其旨を悟り得へし是其本旨は同一理なるが故なり

一聯歌てふものは後れて大よ發達す足利の末より愈工みなり其始は日本武尊かかなへての歌史よ見へ爾來三十一文字の上下の句を二人よて作りしは皆連歌の意なり然れども後世の如く聯屬したるものはなかりしか足利の末比より數句聯屬の法成立しと考ふ是も漢土の詩よある事よて漢の柏梁臺の七言を始めとす唐の顏真卿など聯句甚多し然れども柏梁臺は固より其以後作者爲す所何の面白味もなく夫故よや漢詩は古今人聯句を好み賞するものなく隨て作者も少なく發達せざるものなり然るよ我邦の聯歌よ於ては變化の妙あり隨て詞体語格も立ち頗る發達し又一種の佳境もあるへし然れども詠歌の本旨より論するときは感賞すへきものよはあらず發句の附合なるものは全く聯歌の俗語工

みも面白味もなきよはあらずといへども其本たる聯歌既よ詠歌の本旨よあらされは附合は論よも及はず而發句の世よ行はれしは連歌の行はれし故とは思はず何なれば連歌の濫觴は甚古くして發句の大よ行はれしは遙かに末世よあるも其證とゆふへし要するよ聯歌は畫家か江山不盡の圖を作るよ同し

一古の三十一字の歌は其語自ら漢土周時代の詩の比興の體と相似たるもの往々あり歌詩は當の言葉とちかひ自ら語體あるは人意よして其發する聲は天然なり我邦漢土と一帯水を隔つのみ上古神代はしらす神武の世よ至々海舟運送の事史よ見へし以後は早く海外よ交通ありしや知るへし然らば歌詩の造語自ら相似たるも互よ氣風の通するなしと謂ふへからず古事記中よは神代の歌往々あり長歌は古體の如く見ゆれども三十一文字の歌は萬葉よ載する歌と其體甚しき相違なし余は聖武帝比の歌かと思まちこふ古事記は元明帝の時和銅年間の撰なり萬葉集は聖武帝の時の撰とすれば年代いと近し而其卷中よは遙よ瀕りて雄略帝の比の歌を載す而古事記の歌は多く入れず神代の歌は姑く論せず今日古歌を記録よ徴し慥かよ知る者は萬葉よ就き雄略帝比るよ在り夫れより以

前百八十年餘應神帝の十六年王仁來る事史よ見へなよはずの歌も今よ傳ふ是漢土晋の初代武帝の時よ當れり其以前仲哀帝の時新羅征伐あり漢の獻帝の時よ當れり是より以前神武帝は周惠王の時よて八百五十年前なり而崇神帝の時即漢土漢の元帝竟寧年中任那入貢すれば其以前今の朝鮮地方へ交通ありしは疑ふへからず神代よ速須佐之男命の八雲立の歌又火遠理命をきつとりの歌は三十一文字なり神武の時よあしはらの歌后きのさい河の歌も三十一文字なり其體雄略帝以後の歌の體と甚相違なし余は雄略帝以前の歌は置て論せずといへども應神帝の前より格調の定りたる三十一字の歌ありしなるへし又漢晋時代海外と往來ありしは疑ふへからず是等を以て三十一文字の歌の造語周の詩と相似たるを考へすんはあらず詠嘆の聲造語の格は人意なるか故よ人情氣風稍相同しき時は自然よ造語の相似たるも亦其進化の時を同じくしたるを徴すへきなり神武の時は周の惠王の時とゆふを後世疑ふ説ありといへども三十一文字の歌の周の詩の造語よ似たるを以て考ふれば神武の時は既よ我邦も著るしく進化し其時代の周よ當りしも後人の推算よはあらずらん今古歌を左よ記

し上古の遺風を證すへし

吹黄刀自の歌天武の時

河上のゆつはの村よ草むす常よもかもなとこ乙女よて

坂門人足の歌持統の時

巨勢山のつらくつはきつらく見つゝまぬふな巨勢の春野を

身人部王の歌

大伴の美津の濱よ在る忘れ貝家よ在るいもを忘れて思ふや

長田王の歌和銅の時

わたつみの沖津白浪立田山いつかこへなんいもかあたり見ん

古歌

秋の田のはの上へよきりあふ朝霞いつへのかたよ我か戀やまん

人丸

さゝのははみ山もさやみたれともわれはいもおもふわかれさぬれは

長忌寸意吉麿

いはしろの野中よ立てる結び松心もどけすむかし思へは

高市王子尊

みわ山の山邊もうゆふ短かゆふかくのみゆへよ長くと思ひき

皇子尊宮舍人等働傷作歌

水つでのいそのうらはのいはつしこくさく道を又も見むかも

人丸

はよやすの池の堤のかくれぬのゆくへをしらすとねりはまどふ

買始東人

さゝなみのまかさくれなみまくくつねよも君かおはしたりける

志貴皇子

あられうち霰松原すみのへのをどひおとめと見れどあかぬかも

人丸

秋山のもみしをしけみまとはせるいもをもとめんやましまらすも

もみし葉のちりぬるなへよたまつさのつかひを見れば逢し日をもはゆ

淡海路のどこの山なるいさや川氣のこのころは戀つゝもあらん

吹黄刀自

眞野の浦の與騰の繼橋こゝろゆも思へやいもかいめよし見ゆる
河上のいつもの花のいつもくさませ我勢こときしけめやも

思す様子

あさしかけよはへる山よてる月のあかざる君を山越よ置きて

人丸

三熊野の浦の濱ゆふ百重なす心は思へと直よ逢ぬかも

安部宿禰年足

さはあたりむきへのうへよなくどりのこへなつかしきいしきつまのこ

厚見王

朝よ日よ色つく山の白雲の思ひすくへき君よあらなくよ

春日王

あしひきの山橋のいろよ出てかたらはつきて逢ふ事もあらん

大伴坂上女郎

青山を横きる雲のいろ白く吾とゑまして人よしらゆな

但馬皇女

あきの田のはむきのよれるかたよりよきみよよりなくこちたかりども

弓削皇子天武の皇子

よしの河ゆく勢のはやみしましくもよどむことなくありこせぬかも

全

だきのへのみふねの山よいる雲のつねよあらんとわかかおもはなくよ

是等の歌造語は皆比興の體よて此體古歌よ多くあり扱詩は周の造語多く比興
なり左の例の如し

周南

關々雉鳩在河之洲窈窕淑女君子好逑朱熹曰く與余おもへらく與にして比
南有樛木葛藟藟之樂只君子福履綏之朱熹曰く與余おもへらく與にして比

蠢斯羽詭々兮宜爾子孫振々兮朱熹曰く比余おもへらく興にして比
桃之夭々灼々其華之子于歸宜其室家朱熹曰く興余おもへらく興にして比
翹々錯薪言刈其楚之子于歸言秣其馬朱熹曰く興にして比

邶

汎彼柏舟亦汎其流耿々不寐如有隱憂朱熹曰く比
日居月諸胡迭而徵心之憂矣如匪澣衣朱熹曰く比
綠兮衣兮綠衣黃裳心之憂矣曷維其已全曰く比
終風且暴願我則笑謔浪笑敖中心是悼全曰く比
凱風自南吹彼棘心々々天々母氏劬勞全曰く比
雄雉于飛泄々其羽我之懷自詒伊阻全曰く興
匏有苦葉濟有深涉深則厲淺則揭全曰く比なり

鄘

牆有茨不可掃也中菁之言不可道也全曰く興なり余おもへらく比にして興
鷄之奔々鵲之強々人之無良我以爲兄全曰く興なり

蝦蟇在東莫之敢指女子有行遠父母兄弟全曰く比なり

瞻彼淇澳綠竹猗々有斐君子全曰く興余おもへらく興にして比

小雅

呦々鹿鳴食野之苹我有嘉賓全曰く興なり

節彼南山維石巖々赫々師尹民具爾瞻全曰く興余おもへらく興にして比

宛彼鳴鳩翰飛戾天我心憂傷念昔先人全曰く興

妻兮斐兮成是貝錦彼譖人者亦已太甚全曰く比

蓼々者莪伊蒿哀々父母生我劬勞全曰く比

大雅

縣々瓜瓞民之初生自沮漆全曰く比

芄々械櫜薪之櫛之濟々辟王左右趣之全曰く興

鳧鷖在涇公尸來燕來寧全曰く興

莞彼柔柔其下侯甸將採其劉瘼此下民全曰く比

此類枚舉いとはあらず詩と歌と言葉は固より殊なれども感想語を爲す意

細る所語體符を合す如し扱詩も漢となり晋となり六朝を経て唐に至り比興の造語漸く少く成り行き周の時の如くならず歌も亦後世も及んては比興は少く賦多し因て考ふるも詩も六朝より隨唐に至りて漸く古も遠くなりたり宜へなる哉李白曰く大雅久不作と以へあるなり然るも三十一字の歌は唐時代も當る神龜天平の比る迄も多く古の比興の趣を存したるか如し且又今は世も善く作者もなくなりたる長歌は上古よりありしものなるへしといへども三十一字の歌より規格早く立たしすして聖武帝前後の間も至り漸次發達したるものならん而其發達は六朝の文と唐代の詩は他山の石となりしや知るへからず今萬葉も記したる歌を讀み味ふも其妙趣は周代の詩より言葉もあやありて造語音調漢詩も勝り其藻華の人を動すは隨末唐初の歌行の妙調も類し我が國語故詩よりも音調自然も人を感動せしめ言ふへからざる妙味あり當時の歌人文は六朝を學びたれば歌も唐詩の格調自然も移りたるやと想へり今其證を舉ん

笠磨の歌

れみのめの くしけよいつく かゝみなす みつのはまへよ

一意四句一解の如し前三句は下を喚ひ起す詞則みつの濱邊と云ん爲めの言葉なり余は思ふ古は自然の音調造語下を喚ひ起したる働き後も前置詞となりしならん後世是を枕言葉又は冠り言葉と名つけて一定不變の格となり皆其舊き言葉を守り隨意も前置詞を作らず而其言葉は原と實名詞形容詞の自然も下を喚ひ起す働きをなし下の句の感情を添へたる故も後ちよは只誘引の媒ちとして前後も關係せず音調も句續きの爲め言ひ次くものとなりしならん扱此四句は發端の語とゆふへく句調閑雅和暢なり

さよつらふ ひもときさけす わきもこよ こひつゝをれば
四句一解の如し此四句も至り戀人の事を云ひ顯し輾轉反側の意を述ぶ此句賦も近し情を述ぶる發端語調妙味あり

あけくれの あさきりかくり なくたつの ねのみしなかゆ

此四句一解の如し戀情眼前の景も移り意を寫す比もして興なり

わかこふる ちゑのひとへも なくさむる こゝろもあれやと

此四句一解の如し思ふ情愈切も自ら問を排する有様見るか如し是則賦な

いへのあたり わかたちみれば あをはたの かつらきやまよ
たなひける しらくもかくり

以上六句一解の如し情況實景離愁言葉見へ思愈切六句興なり
あまさかる ひなのくよへよ たしむかふ あはしをすき
あはしまを ろかひよみつ

以上六句一解の如し旅況寫思造語妙是は賦近し
あさなきよ かこのこへよひ ゆふなきよ かしのとしつ

此四句一解の如く而對句なり舟中無聊増々人を思ふの情見ゆ是亦賦近
くして興なり

なみのへを いゆきさくふみ いはのまを いゆきもとほり

此四句一解の如く而對句なり海上矚目の景況孤旅の情見へ賦近し
いなひつま うらみをすきて とりしもの なつさひゆけは

此四句一解の如く景況を寄せて人を戀ひ思ふ前置詞を用ひて詞意活用句

意轉變尤妙自然よ比よして賦近し

いへのしま ありそのうへよ うちなひき あしよおひたる なのりその

此五句中うちなひきは單句の如く而五句一解の如しいへのしまの言葉自
然よ古郷を思ふ料となりなのりその實名詞は下の句よかゝりくる句關言

葉のあや妙々賦近し

なとかもいもよ のらすきよけむ

此二句一解の如し別時言を缺きたるを悔ひ憾み慕ふ情の語關共よ妙味あ
り賦近し

人丸の歌

石見のみ つのし浦みを 浦なしと 人こそみらめ 瀧なしと

人こそみらめ

此六句一解の如し而末二句は對句なり

よしゑやし 浦はなくとも よしゑやし 瀧はなくとも

此四句一解の如し而對句なり以上十句賦なり

いさなとり 海邊をさして わたつの 荒磯の上へよ かゝをなる
玉藻沖津藻

六句一解の如し

朝羽ふる 風こそきよせ 夕羽ふる 浪こそきよせ

四句一解の如し而對句なり以上十句興なり

浪のむた かよりかくよる 玉藻なす 依り寝しいもを 露霜の

置てしくれば

六句一解の如し前置詞を用ひ言葉のあや自然の妙あり賦とゆふへし

此道の 八十隈ことよ よろつたひ かへりみすれど

四句一解の如し賦なり

いや遠よ 里はさかりぬ ます高よ 山もこゑきぬ

四句一解の如し而對句なり是も賦なり

夏草の 思ひしなへて 玄ぬふらん

三句一解の如し而末一句單句の如し興の如くよして賦なり

いもか門見ん なひけこの山

二句一解の如し而賦なり

全篇絶妙好辞説んとして言ひ盡しかたき妙味あり

坂上女郎の歌

おしてるや なよはのすけの ねもころよ 君かきしを 年ふかく

長くし言へは

六句一解の如し賦なり

ますかゝみ ときし心を 許してし 其日のきわみ

四句一解の如し賦なり

浪のむた なひく玉藻の とよかくよ 心はもたす 大船の

たのめるときよ

六句一解の如し賦なり

千早ふる 神やかれなん 空蟬の 人かいむらん

四句一解の如し對句を用ひ賦なり

かよひせし 君も来まさす たまつさの 使も見へす なりぬれば
いともすへなみ

六句一解の如し而上二句は語意對し賦なり

ぬはたまの 夜るはすからよ あからひく 日もくるゝまで

四句一解の如し全く對句を用ひ賦なり

なけゝとも しるしをなしみ おもへとも たつきをしらよ

四句一解の只し而對句を用ひ賦なり

たをやめと いわくもしるく たわらはの 音のみ泣つゝ たちどまり

五句一解の如く而末一句は單句の如し賦なり

君か使ぞ 待やかねけん

二句一解の如し賦なり

山上憶良問答歌中造語

風交り 雨降る夜の 雨交り 雪降る夜は

右對句

堅瓠と 取りつゝしろひ 糟ゆ酒 うちすゝろひて

右對句

天地は ひろしといへど 我か爲めは さくやなりぬる 日月は

あかしといへど 我か爲めは てりやたまはぬ

右は隔句對なり

かまどよは 煙吹立す こしきよは 脚の巢かきて

右對句

當時の長歌は大凡前より列記したる類にて詞體句法皆相同し中よはいさゝか異りたるものなきよはあらねども文武聖武兩帝の比の長歌は一定の句格より從ひ全篇を分拆區別すれば皆前より注釋したる規格より違ふもの幾ど希なり是より唐詩を列記して詞格の相似たるを證すへし

李白詩

棄我去者 昨日之日不可留 亂我心者 今日之日多煩憂

是隔句對山上憶良の歌より同し

長風萬里送秋雁 對此可以酣高樓

以上六句一解

蓬萊文章建安骨 中間小謝又清發 俱懷逸興壯思飛 欲上青天覽日月

以上四句一解

抽刀斷水水更流 舉杯銷愁愁更愁

右對句

人生在世不稱意 明朝散髮弄扁舟

右四句一解

杜甫詩

十日畫一水 五日畫一石

右對句なり

能事不受相促迫 王宰始肯留真跡 壯哉岷嶓方壺圖 掛君高堂之素壁

以上六句一解

巴陵洞庭日本東 赤岸水與銀河通 中有雲氣隨飛龍

此一句は單句なり

舟人漁子入浦淑 山木盡亞洪濤風

以上五句一解なり

尤工遠勢古莫比 咫尺應須論萬里 焉得并州快剪刀 剪取吳淞半江水

以上四句一解なり

又

今夕何夕歲云徂 更長燭短不可孤 咸陽客舍一事無 相與博塞爲歡娛

以上四句一解なり

馮陵大叫呼五白 袒跣不肯成烏盧 英雄有時亦如此 邂逅豈即非良圖

以上四句一解なり

君莫笑劉毅從來布衣願 家無儋石輸百萬

以上二句一解なり

李白詩

黃帝鑄鼎于荆山 煉丹砂

此一句は單句なり

丹砂成黃金 騎龍飛上太清家

以上三句一解なり

雲愁海思令人嗟 宮中綵女顏如花 飄然揮手凌紫霞 從風縱體登鸞車

以上四句一解なり

登鸞車侍軒轅 遊遊青天中 其樂不可言

以上三句一解なり

高適詩

邯鄲城南遊俠子 自矜生長邯鄲裏 千場縱博家仍富 幾處報讎身不死

以上四句一解末二句對句なり

宅中笑歌日紛紛 門外車馬如雲屯 未知肝膽向誰是 令人却憶平原君

以上四句一解初の二句語意對す

君不見今人交態薄 黃金用盡還疎索

以上二句一解

以茲感歎辭舊遊 更於時事無所求 且與少年飲美酒 往來射獵西山頭

以上四句一解なり

張渭詩

去年上策不見收 今年寄食仍淹留 羨君有酒能便醉 羨君無錢能不憂

四句一解皆對句なり

如今五侯不待客 羨君不入五侯宅 如今七貴方自尊 羨君不過七貴門

以上四句隔句對なり

丈夫會應有知己 世上悠悠安足論

以上六句一解なれども末二句語轉し二句一解の如し

張籍詩

洛陽北門北邙道 喪車轆々入秋草

二句一解

車前齊唱薤露歌 高墳新起日峨々 朝々暮々人送葬 洛陽城中人更多

四句一解

千金立碑高百尺 終作誰家柱下石

二句一解

山頭松柏半無主 地下白骨多於土 寒食家々送紙錢 烏窠作巢銜上樹

四句一解初二句對なり

人居市朝未解愁 請見暫向北邙遊

二句一解

李白詩

魯客抱白鶴 別余往秦山 初行若片雲 杳在青崖間

四句一解の如し

高々至天門 日觀近可舉 雲山望不及 此去何時還

又四句一解の如し

大凡唐詩は四句一解多し玄からされは六句一解多し又五句三句二句を以て一解とするものなきよあらされとも少き方なり歌行の類は必後の句數中初の各解句數より少きもの多し末は三句二句一解とし句をつめるか常則なり前記

したる長歌と後記したる唐詩と讀みくらへ味ふべし詞格より句調自然と相似たる所ある誣ゆへからざる趣あり是以余は前も謂ふ如く長歌は句法詞體の發達して一定したるは文武聖武兩帝神龜天平の比として隨唐の詩の句法詞體の一定したると其時を同くしたるやと考ふるなり但五字七字とつらね綴る體も一定したるは當時の人の音調と適當せる自然の慣習なるへし後世に至り七字五字と變したるも亦自然の音調人意なれども天然の變遷なり漢土までも周より漢の初迄は五言の詩多し柏梁臺の詩七言なれども漢晋は多く五言なり六朝後隨唐に至り七言の詩多くなりたるも自然時人の口拍子と叶ひし變化なり扱又周より漢迄の人の感覺詠歎の聲は多く比興の體をなし我が三十一文字の古歌も多く其體あり然らば其時代の世の人の聲なるを知るへきなり因て歌詩は時世の口調と趣く事誣ゆへからざるを知るへし又長歌は其末も必反歌を附する事一定の格とす是亦六朝以後碑文の末も必銘詞を付けたると其趣き自ら相同し是等を以ても長歌の體定りたりしは隨唐の時世と同じきこと疑なしと考ふ

左の詩は笠磨の長歌と事柄同じ故に下は附す

漢詩の音調語體自ら唐と異なるをも見るへし

秦嘉爲上郡掾其妻徐淑疾還家不獲面別贈詩云三首之一

皇靈無私親爲善荷天祿傷我與爾身少小罹犖獨既得結大義歡樂苦不足念當遠
離別思念叙款曲河廣無舟梁道近隔丘陸臨路懷惆悵中駕正踟躕浮雲起高山悲
風激深谷良馬不廻鞍輕車不轉轂鍼藥可屢進愁思難爲數貞士篤終始恩義不可
促

詩の音節體致世々同しからす三百篇は周の音節體致なり離騷は離騷の音節體
致なり夫より漢魏に至り晉以後六朝となり唐宗より今に至る自ら時世々の
音節體致あり其音節體致を踏襲したればとて古は非ず和歌も同じ事にて萬
葉の歌は其時代の言葉なり其比の音節體致なり萬葉の如き句調をなしたると
て和歌の古義は叶ひたると謂ふへからす余の古を慕ふは和歌も詩もても
造語風體を慕ふはあらず古人の能く性靈を抒して浮言假飾なきを慕ふなり
寧虚構輕綺の工みなるより誠實清真の拙き方古に近しと謂ふへし歌詩程誠な

るものはなきは歌詩程虚工采縵なるものはなしと謂はねはならぬ世の中とな
りしを傷む又詩は彼の古より泛寄の言多し和歌は古泛寄の言少し却て現實の
言多し是我和歌の詩に勝りたるを見る此語は未古人は説ありしを聞かす余現
世の大人は質さんと欲す

一千載 霜さへてさよも長井の浦寒み明やらすとや千鳥鳴らん

知家 さよふけて霰松原住吉の浦吹風は千鳥鳴なり

此二首いつれも調はよしされと取舍なかるへからす余は此等の古歌に就ひて
相似たるもの二首つゝ對照し歌學ふ少年の判別する爲め教科書を編輯せんと
思へども身多事として一冊を爲す程も見出し得ず然れども相似たるものを見
れば必録して自ら研究す

一我が古の長歌は五文字七文字と續くを習ひとす是古人詠歌の常體其時の口調
は叶ひし事なるへし然るは漢土周の比の詩を讀むは十の八九四言なれども其
中まゝ五言六言もありて其續きは多く字少なき方上にて字多き方下とす四言
五言と續く類なり彼此言葉異り詩歌の別はあれども古人の口調は上の句短く

下の句長きは海の東西を論せず古人同調なるも亦奇と云ふへし然らば萬葉も載せたる比の長歌も此續き方は其上の習存して變せざるものと謂ふも可ならん今詩經より其例を左に記す

有淵濟盈 有鷺雉鳴 濟盈不濡軌 雉鳴求其牡

云誰之思 美孟姜矣 期我乎桑中 要我乎上宮

百爾所思 不如我所之

女子有行 遠父母兄弟

此類最多し

慨其嘆矣 慨其嘆矣 遇人之艱難矣

蟲飛薨々 甘與子同夢

園有桃 其實之穢

不知我者 謂我士也 驕彼人是哉

坎々伐輪兮 寘之河之漘兮 河水清且淪 猗不綠不穉 胡取禾三百困

方何爲期 胡然我念之

遊游從之 宛在水中央

予口卒瘁 曰予未有室家

予室翹々 風雨所漂搖

以上は國風なれども小雅大雅も右の類あり小雅も

我有旨酒 嘉賓式燕以敖

上の句は短く下の句は長き皆此類尤も變體もなきよあらねども大凡は右の格なり是以て古人の口調は東西同じしを知るへし而して詩も後世は七言出來上より字多き句を置く格も始り歌も後世は上の句長く下の句短くなり則今様歌調の七文字五文字と變し短長顛倒す古今此相違は實に意外の大變更よて人意とは謂へ東西一樣古今自然の轉變後世の事も知るへからざるものなり

一隋の侯夫人の一點春とゆふ調子の詩餘あり(詩餘は詩の全く異なる陳隋の比より唐の時に竹田以前作者を見ず今武部職雅樂部にて宮中の御宴を知らぬる間陵王は詩餘なり我邦集の中に録存す然るに詩餘は音樂に合せ歌ふもの故彼の音を知らざる五六十調あり出處を得へ

詩餘に付きては猶云ふべき事あり後に譲り其字句は五文字七文字とす我邦の歌五文字七文字と符合するも亦奇とゆふへし左に記す

柳雪消無日 捲簾時自照 庭梅對我有憐意 先露枝頭一點春

是なりされど詩餘の調子は讀むと拍子我長歌とは全く異なる我長歌は唐の歌行と全く相似たるものなり故詩餘は六朝の末より起りたるものなれども我と更に通せず我古人の漢學者も作者なし近世竹田に至り始めて數閱自作あり余壯年詩餘を志したる比は世間と詩餘を作るものを聞かざりし

一人或は問ものあり相替らす詩歌の慰ありやと余は此問を聞て意外と思ふなり古人の集を讀は慰とも云ふへし己作るは決して慰をわらず誠と已むを得ざるの聲なり詩歌を技藝視するさへ本意をわらずと思ふ然るも慰と心得るは間遠の沙汰なり人間悲喜慨嘆の聲は決して慰を發するものよはわらざるなり

一はのくと明石の浦の朝霧を鳴かくれ行舟をしと思ふ

人丸の歌と云ひ傳ふれども具眼の者は人丸より後の歌となす李白の集中も長干行二首あり其一は黃庭堅李益の作となす具眼とゆふへし此類詩歌と相似た

るもの多し書經中漢人の文言擧入少しとせず後世より觀て分明なり古今言葉の掩ふへからざるを證すへし歌詩の誦すへきは言葉の古きよはわらず余思ふ言葉は時の言葉を用ゆるを憚らざるへし若し古言のみを用歌作らんよは幾と解釋を要すへく古言を知らぬ人より見ては其意解せざるへし

一歌詩の上手よても世と顯はれぬもの往々あり余か同僚僅々數人中よても横山由清の歌生田精の詩傳ふるよ足るへき佳作往々あれども世之を知り誦する稀なり此種の人古今世間幾百千人ありやしかも二氏の才と踰ゆる幾十倍よして終る其聲の聞へざるもの幾千百人なるも知るへからず皆售らすして聞へざるものなり作りし歌詩生前刊行世に公けよして聞へざるか如きは其品の賤劣論するよも足らず

一詩餘は宋以後歷代盛よ行はれ作者少なからずされど詩作る人程多からず音律を知らされは作れぬ故なり詩は詠誦するのみ音律を蒙らせぬ故易し詩餘は管絃よ合せ歌ふもの故よ一字調よ叶はぬものありても落腔とゆふて取らざるなり歌へぬ故よ取るへからざるなり詩餘は一篇の平仄押韻も右の如く殊の外六

ケ敷規則も拘束せられ言ひ度き事も差支多く言へぬ中も面白き句作らんと考ふる事故も古今佳作は甚少し詩餘は長短句よて九字句より八字句七字句六五四三二字句もあり又七字句中も一字の句讀あり韻も一篇中換韻の法ありて前の句後の句と句を跨ひて韻を押すものもあり是等の法は我邦人も曾得すへしといへとも字音の叶ふや否とゆふに至つて彼の音を知らぬ我邦人もは出来ぬなり抑も詩韻は南齊の時始て平上去入を分つ後汝南周子四聲切韻を作る梁の沈約四聲譜を作り隋の仁壽の初切韻五卷あり唐の儀鳳の時これに附益す天寶の時又増補ありこれを名つけて唐韻とゆふ宋の祥符の初陳彭年邱繼重ねて修し名を易へて廣韻とゆふ景德四年成綸等詔りを承て詳定し名を別よして韻畧とゆふ景祐の初宋祁鄭戩建言し廣韻は繁とし畧は當を失したりとして別よ刊定を乞ひ命を得て寶元二年其書成り詔して集韻と名つく名屢易るといへとも精査審定したるものよて詩韻も用ゆるのみならず詞韻も用ひ不可なきなり然るも後世は詞韻別よ出来たり其初は宋の朱希真なり其後綠斐軒の詞林要韻出来清くなりて詞韻略あり李漁の詞韻あり二十七部とす又許昂霄詞韻考畧

を緝す近世吳縣戈載順卿詞林正韻あり十九部とす愈審かよして詩韻と賦をなす然れども余は集韻を用ひて不可なしと思へり扱又詞の六ヶ敷例を云へば張玉田か寄間集中の詞を歌譜と案し惜花春起早と云ふ鎖窓深此三字中深の字調は協はず改めて鎖窓幽とす猶協はず又改めて鎖窓明となし始て調は叶ふと云ふ深幽明皆平字なれども字音輕清重濁の違ひある故なり其六ヶ敷事此の如し我邦人彼の音律を知らずして出来得へき事とわらす余一時詩餘を研究したりし比我邦俗調の端歌替歌を作り善く歌ふ者も歌はせて試みたるも字餘りなどは申まてなし假名一字の音違ふときは聲調澁りて謠ふも謠ひよく聞きくるし是を以て前の深幽明の説の實なるを曉り我邦人詩餘を作るは出来得ざる事と思ひあきらめたり扱又詩餘は唐の時より始りしといへとも余は六朝の末よりありしものと思へり何なれば現に陳隋の詞もあればなり且思ふ其始は詩の散聲よ起りしならん譬へは渭城朝雨浥輕塵客舍青青柳色新此二句末三字をくり返し謠へは七字三字七字三字の四句となる此類後よ字を填めて同調の詩餘と成り故に填詞とゆふ名もあるならん歟他日彼の人よ質さんと思ふなり

煙草のむひま畢

本

明治三十年三月二十六日印刷

同年南月三十日發行

四月二日

(非賣品)

著作者兼發行者

大給恒

東京牛込區市谷河田町七番地

印刷者

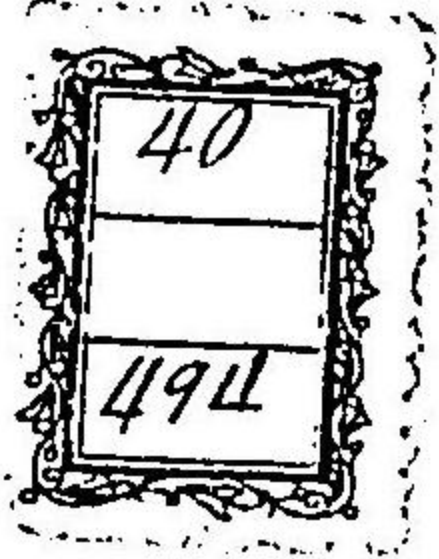
岡本文治

東京麴町區麴町拾丁目四番地

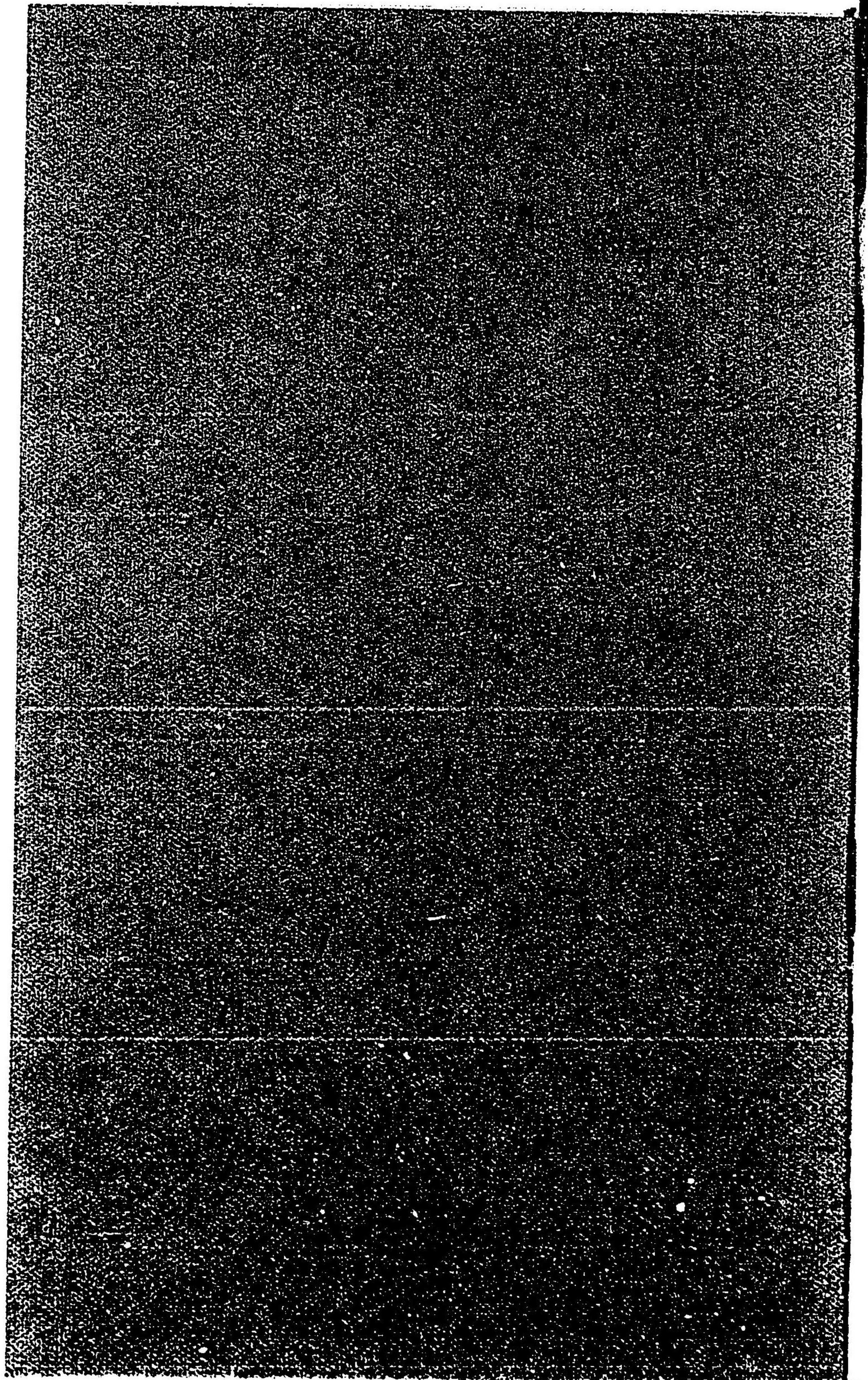
印刷所

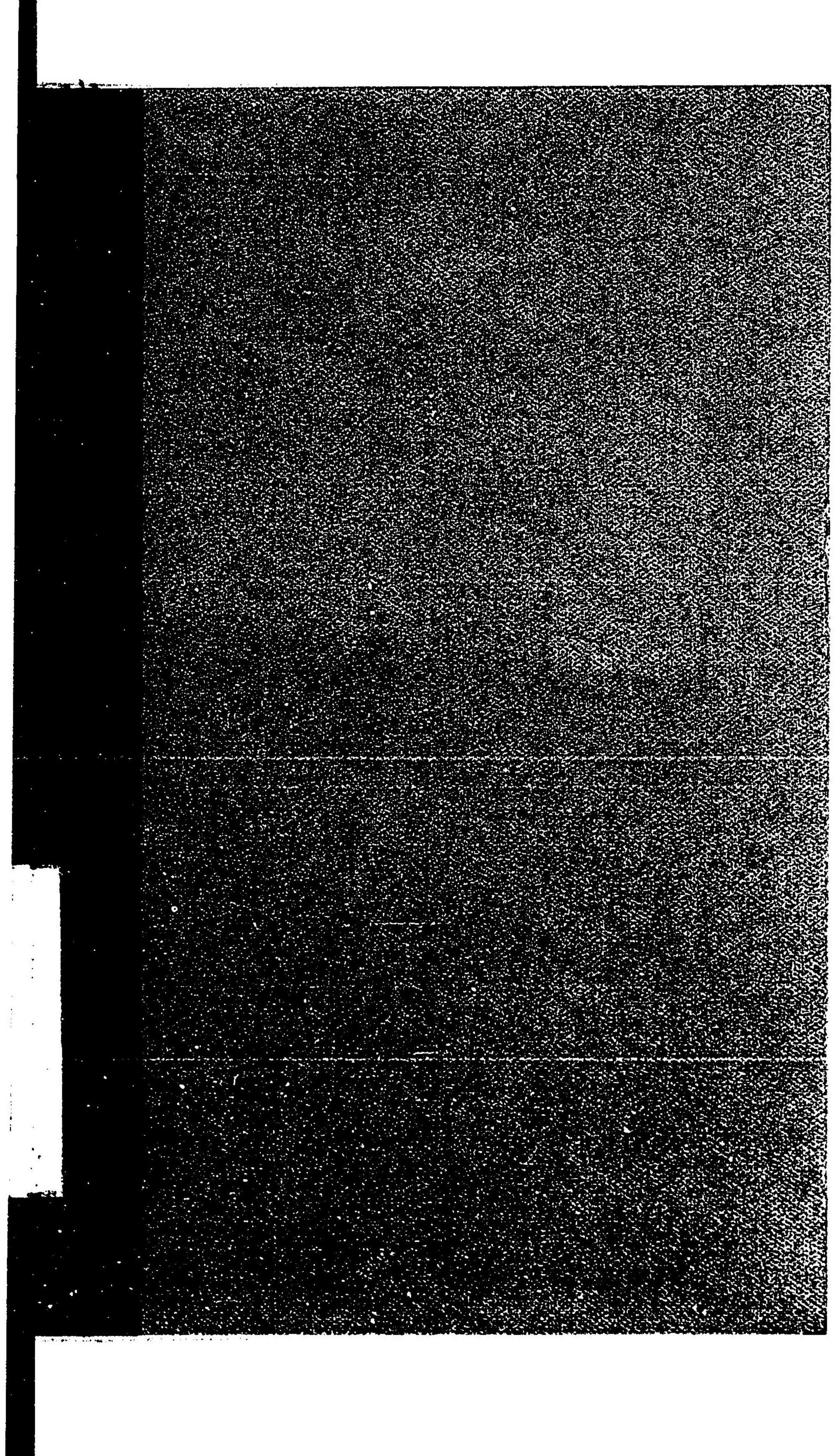
岡本活版所

東京麴町區麴町拾丁目四番地



IT-3S-57





40

494

煙草のむひま

国立国会図書館

205246-000-9

40-494

煙草のむひま

大給 亀峠/著

M30

EDV-0300

